第３編　生糸の精練法

大島紬の原料絹糸は生糸を撚糸した後，精練して大島紬の原料糸となる。この精練前の生糸には，絹繊維（フイブロイン）のほかに不純物（セリシン又はニカワ質）があるので，このセリシンを除去して絹繊維だけとなす方法を精練という。
このセリシンはアルカリに良く溶解するので生糸の精練は普通アルカリ剤でおこなう。

第１章　石鹸，ソーダによる精練法

マルセル石鹸10～15％，炭酸ソーダ３～５％に生糸を入れ，１～２時間煮るとセリシンが取れて絹繊維だけとなる。これを水洗いすると殆んど純白となるので普通漂白はしない。精練後の水洗いを十分おこなえば酸中和の必要はない。

絹鳴り

精練後絹糸を酸洗いして乾燥すると，きいきいと音がする。これを絹鳴りという。これを中性洗剤で洗うとこの音はなくなる。

練減り

この精練によって20％程度重量が少なくなる，これを練減りという。大島紬の絹糸はこの練減りを計算に入れて撚糸し，精練すると目的の30ｇ及び40ｇ付きの絹糸となす。

第２章　パパイン酵素による精練

この方法は，酵素によって生糸のセリシンを溶解させて，絹繊維のフイブロインだけとなす方法である。

第３章　電気精練

この方法は，上記石鹸，ソーダ練りである程度精練した液に電流を通すと，残りの練不足分を一度に精練する方法である。

備　考

上記２及び３章は１時期利用されたことがあるので，このような方法があることを参考までに記しました。

第4章　絹糸の完全練及び半練

絹の精練は普通セリシンを全部除去して完全練がおこなわれるのであるが，その織物によって完全に精練しないよう，例えば8分だけ精練し残りの2分はセリシンを残すように精練するのが8分練りという絹糸を造る方法である。したがって，その目的によって半練り又は7・8分練り等をして製品化する方法がある。この精練は精練剤を少なくするとか，温度を低く，又時間を短くし，好みの糸に練れた時精練を終わるのである。

第5章　青味付け

精練した絹糸を淡い青色に通すと，この糸は普通の糸より白く見える。このように青味に染めることを青味付けという。

例えば，ワイシャツに青味のある白と普通の白いワイシャツとがある等，その目的によって青味付けがおこなわれる。その方法は精練液に藍液の泡を加えて精練するとか，精練後酸性染料の堅ろうなブルーで青味付けする方法がある。